

翻訳に「正解」はないのです

灰島 かり

そうそう、でもでも

後藤竜二さんと、それを受けた古田足日さんの寄稿を拝読して「そうそう。でもでも」と思いました。実際に翻訳に携わる人間はいったい何を考えているのか、説明が求められているようです。機会をいただいたので、困惑しつつ苦しみつつ、私見をご報告します（ただし『おかあさん、げんきですか』の韓国語訳についてはなく、一般論です）。

まずお二人の作家と共通しているのは、翻訳が原作を良く理解して、出来る限り原作を尊重したものであってほしいと願っているところです。違っているところは、そうはいっても、名前を（無断で）変えることもあるし、タイトルを（無断で）変えることもあるよなあ、と思うところです。

音と意味と文化背景

まず名前の問題から。たとえば日本語で書かれた現代の

子どもの本に、こういう書き出しの文章があったとします。「ぼくの母親は、なにを考えたのか、ぼくに『夢の介』という名前をつけた。ここからぼくの悪夢のような人生が始まったんだ」

「夢の介」という名前から、ストーリーが転がっていきま（す（というようにしてください））。この本を英語に翻訳するときに、名前を「Yumenosuke」とすれば、誠実な訳でしょうか？ もちろんこれでは、話を通じませんよね。では注をつける？ 注をつければ、説明や解説ができるので、実際に翻訳する場合は、注に頼ることが多いです。とはいえ注は煩雑だし、読者の注意をそらしてしまうこともあって、できれば避けたいものでもあります。英訳者は「夢＝dream」の意味の入った古めかしい男子名を探して、置きかえようとするかもしれません。それがあれば万々歳。けれどもそんなに都合よく、事は運ばない……

ここから翻訳者の苦闘が始まって、ああでもない、こうでもない……。その結果、この本の翻訳出版をあきらめるということもあれば、音も意味も違うけれどぴったりの名前を思いついて、快訳ができることもあるんです。

名前ひとつにも、音と意味と文化的な背景、そしてそれが果たす役割があります。翻訳は、そのうちのひとつの面だけにスポットを当てるしかないために、他を活かすために音を捨てることもあるのです。